ときに亡くなり、妻とは五十五歳で死別している。町医をしながら、四十歳頃から執筆活動を続けている。その著書数はわかっているものだけでも五十数巻五十数冊ある。

その著書の中の処女作である『病家須知』は一八三二～三四（天保三～五）年、重誠四十二歳の時から書かれたもので八巻八冊（三五四頁からなる和綴本）で構成されている。

『病家須知』とは「病人を抱えた家の者がよく知っておかねばならないこと」という意味で、別名『病家心得草』（一～六巻）と言って、当時の一般庶民向けに書かれた家庭医学・看護書と最後の七～八巻は『坐婆必研』、別名『ことぶき草』という産婆（現在の助産師）むけに書かれた専門書である。

第一巻は養生の心得、第二巻は食物の摂り方病状別の食物の適否・摂取法、第三巻は小児養育の心得、第四巻は婦人病について、第五巻は梅毒・肥前瘡・陰癬・傷寒・時疫・痢病・脚気と伝染病について、第六巻は食中毒・毒物中毒・昏睡・卒中・眩暈・癲癇などの発作・鼻血・吐血・火傷・咬傷・金瘡打撲・捻挫脱臼など急症の処置・処方について第七・八巻は産科を対象にしたものである。産科は近世医学の中でも水準が高く、重誠も胎児を鈎で引き出すことの危険性の指摘や、産婦の精神的・肉体的負担の大きい産椅子の廃止の主張など、医学資料としても価値が高いと思われる。現代文に訳してみて、『病家須知』はこれまでの看護法を集大成した本としては日本で最初の本であると言えるし、幼少の頃から父親について学んだ漢方を中心とした医療の実践を通して学んだものや、自ら工夫して効果を得た看護法を書いている点では彼独自のものでもある。

「日本を知ることは江戸を知る」ことであるといわれる。それは今日の日本の暮らしや文化の原型が江戸時代特に後期に出来上がったからである。少子高齢の現代社会の中に見られるいろいろな子どもたちの歪みや、生活習慣病などが云々されている現代こそ、この本に書かれている江戸人の病気の予防や生活の知恵の一端を学ぶ必要があると思う。

（平成十八年十一月例会）

「わが国初の狂犬病人体用ワクチン開発の経緯」講演要旨

唐仁原　景昭

一　わが国初の狂犬病人体用ワクチン

わが国において初めてパスツール氏予防注射法を開始したのは、田中丸治平著「狂犬病論」によれば、「当時長崎医学専門学校にて栗本氏初めてパスツール氏予防注射法を開始せり之を本邦に於ける該注射法施行の嚆矢となす」と記載され、また、山脇圭吉著「日本帝国家畜伝染病予防史」において「依って明治二十八年八月当時の長崎病院内科医

長栗本東明はパストール氏法に依って狂犬病犬の脳を家兎に接種して得たる、第一一代接種苗を被咬傷者二五名に接種したるに、接種者は一名も発病しなかったという。之れ本邦に於ける狂犬病予防接種の嚆矢である。」との記載がなされていた。

このたび、新史料「官報明治二十八年九月十二日～十四日号」を入手し詳細分析を行った結果新しい知見を得たので報告する。

二　ワクチン開発に用いた種苗の作製

栗本東明氏によるワクチン開発については過去の史料に記載されているが、それに用いた種苗がどこからもたらされたかについての記載はみられなかった。それがこのたびの調査により明らかとなった。

栗本は二六年三月頃より、長崎市内に流行が始まったのを機として、撲殺犬の脳及び脊髄を採取して注射乳液を造り家兎頭蓋骨の一小部を取り除き頭蓋骨内に注入し、病毒感染を試みたところ二三頭中一八頭は一定の症状を呈し注射後一〇日二三時間乃至二九日一一時間三五分の間に斃死することを確認し、ワクチン種苗とした。

三　免疫獲得家兎の作出

人体接種試験の前に動物が果たして免疫獲得をするか否かを実証するため、二兎に対し弱毒注射液を暫時に毒力強度を増強しつつ一五日かけて毎日左右の臀部に〇・五gづつ交互に注射して、一五日目を以って予防注射完了とした。免疫獲得を確認するためこの二頭の他対照として免疫無処置兎二頭を用いて比較試験のため両群に野外毒を硬脳膜下接種したところ、免疫処理した二頭は発症せず対照の二頭は特徴的症状を発し斃死したのみならず、斃死兎の腸管から作製した注射液を健康兎腸内に接種して再現試験を実施し狂犬病毒による再現性を確認した。

六　島原半島における狂犬病発生の実態

明治二六年三月頃長崎市内に発生し一時消滅したかに見えた矢先、翌二七年一月から二八年三月にかけて島原半島に転移し半島内全域に大流行を来たし、六七名の咬傷者中二一名の発症者を数え、その死亡率は三一・三四％の高率に上った。

咬傷部位と発症までの経過では顔面咬傷が二六日で最も早く、足部咬傷では最長七六日後であったが、年齢及び男女の別での差異は認められなかった。

七　初めての人体接種

栗本東明が始めて狂犬病予防ワクチン人体接種に踏み切ったのは、パスツール研究所内でルイ・パスツールが世界で始めて成功したのが一八八五年であるから、その九年後の成功となる。第一回の接種は明治二七年八月一二日福岡県福岡市の狂犬咬傷患者からの要請により一〇月一八日から一一月六日までの二一日間に一四回の接種を受け発症を免れた。

次いで翌二八年二月七日に咬傷を受けた島原半島内の大流行時から本格的に接種を始め、七月八日までの間に三二

名の患者に接種を行い、途中脱落者七名を除く二五名の治療に成功した。副反応として、注射部位に軽微な疼痛を訴える者や稀に鼠蹊部リンパ節の腫脹を来たすことがあったがいずれも二～三日で消散したという。

八　予防的接種法

栗本東明はワクチンの治療的利用法に止まらず予防的接種法にまで研究を進め、助手二名と狂犬病毒試験に従事する小使い三名の計五名の健康体に対し敢えて予防接種を行った結果何ら異常反応、障害を起さず経過し、咬傷を受けてからの曝露後免疫のみならず未だ咬傷を受けざる者の予防的注射法においても利用できることを報告している。

（平成十八年十二月例会）

医学史に見る歯科の歴史――「咬合と全身」の過去と現在――

永田　和弘

医学の歴史は教養としてではなく方法論・思想として重要である。歯科医学史の編纂は本来一体のものである医学から歯科学を切り離すつらい作業である。しかし、ヒポクラテスを始め、古今東西の著名な医学者は例外なく口腔にも優れた観察をしており、編纂された歯科医学史はそのまま医学史となる。優れた歯科医学史は優れた医学史である。

恩師中川米造先生は「医学を見る眼とは医学の中に時代の思想がインプリントされていることを見る眼である」と述べられた。私はそれをもじって「患者を診る眼は観察の中にその時代の医学の思想がインプリントされていることを見る眼である」と考えている。EBMも良いが、それに拘束されない姿勢はもっと重要である。

さて、「身体の一部である口腔が全身とどのように関わってきたか」とか「医師（歯科医師）は口腔をどのように診るか」は簡単な質問のようで実は困難な問題をはらんでいる。「口腔の異変は身体全体に影響し、身体の異変は口腔に現れる」のであるが、このような口腔への視線はまだ一般的ではない。全体論の立場から歯科領域を見てみればどうなるか。先人は診ている。

「病気の初発は？　頭痛か、耳か、それとも歯か。」（ヒポクラテス）

「歯の不調は身体の不調に繋がる。」（Nicolaus Tulp：一五九三―一六七四）

「虫歯は種々の病気の始まりかもしれない」（Pierre Fauchard：一六七八―一七六一）

虫歯と歯周病は口腔に現れる二大疾患と言われるが、咬合の不調和はこれらに共通する原因となっている。口腔疾患と全身との関係は「咬合と全身の関係」と言ってよい。

「咬合を見る眼」の三つのキー・ワードを挙げてみる。

（1）ヒポクラテス（B・C四六〇？―B・C三七七―三五